

●アトリエ訪問

東 政 雄 会 員



東さんのアトリエは、亀田市昭和町の静かな住宅街にある。昭和町あたりには、教育大学函館分校、函館商業高校、函館昭和女子学園高校、少し離れて函館海洋气象台、函館水道の水漁池があったりして、函館とは区別出来ぬ様な市である。相当以前から函館と合併の話があるのであるが、変にこじれてまだ実現出来ずにいるのである。妙な話である。

東さんは若い頃、田辺三重松さんの大黒町にあった「マル万」呉服洋物店の向いで、父君が青果物の店を開いていた。東さんが絵を描く事になったのも、田辺さんの影響が多分にあったわけである。当時の田辺さんも若く、前垂れ姿で店番をしながら、電灯の下で函館教育会発行の小学生用課外読本の様なものの、挿絵を描いていたものであった。

東さんは青果物の配達等で多忙で、絵を描く時間が少く、2月頃だけは多少暇で、其頃描いた雪山の絵を憶えている。

アトリエは10畳程の長方形で、南面して暖い。百号の去年の創元会の出品画や、近作の80号の桐の絵の外、花や函館風景を描いた、3号、サムホールが10余点壁にかけられていた。今年個展をやるつもりだったが、体の状態があまりよくないので、一寸面倒だと話された。2年程以前長期入院治療されたが、その後もあまり勝れず、右手が少し不自由なと、耳鳴りでお困りの様であった。それに足も多少不自由で、あまり風景写生に出られぬのも気の毒である。しかしそれ等の病苦を克服して頑張り、意慾的な作品を生み出されているのには敬服した。この頃はあれ程好きだったタバコも廃し、極力体に気をつけて「御互に無理せず長生きして絵を描きましょう」と話された。

東さんは人情家である。長兄である同君は妹さん達の面倒を見、家族を愛し、お訪ねした折も、中国から引揚げられた妹さんが、東君のために不自由な中を持参してくれたと言う、齋白石や中国の木版画の画集等を拝見した。東さんは御家族の話、殊に御息等の話をされる時等は、本当に楽しく幸福そうである。

画室の窓から見える庭に、東さん丹精の、ボケが3株程見事に花をつけていた。

訪問者 池谷 虎一 会員

小 野 州 一 会 員

小野さんと知り合って10年余にもなるだろうか。今は家も近いので行ったり来たりも数多い。

酒を飲んだり食事をしたり、時たまパドミントンをやったり、その間をお互いの子供がうるちよるしている。

場所は東京の西、郊外電車なら都心から1時間余、車なら高速道路を走って3、40分。緑が多く吹く風まださわやかさを感じさせる。ここに僕が住みついたのが一昨年。昨年小野さんが越してきた。その他友人の絵描が4、5人住みついたり、既に住みついていたのや新たに越してきた出版関係の人間やカメラマンな

ど、顔見知りになった人間たちも含めて、奇妙な人種が棲息している。神奈川県大和市中央林間である。丹沢の山並が中の位置に望め、その向こうに場所によって富士が見える。

あまり身近につき合っているので、急にアトリエ訪問と言うのもどうもこぼれゆい。いっそ台所訪問とゆこうかと笑い合った位だから僕は訪問不適任者だと思うので改めてのアトリエ訪問はなしである。幾人かの人がこの小文を読み、それから小野さんの何かを想像する人が居るとしたならば、僕は文筆をもって職としている訳ではないので、これは既に裏切行為にも似ていると思うのだ。

小野さんは昨年暮に、銀座のかなり大きい会場を持つ画廊で個展を開いた。作品は殆んど昨年のヨーロッパで出会ったモチーフで、大作も含めて数10点の展示だった。それはまるで腕の良い猟師が、恰好の獲物に真っ向から立ち向うことに、限らない愛情や興奮を憶え、張りつめた弓につがれた矢がまっしぐらに獲物にすっ飛んで行ったのだなと僕は思った。それは昨年、バリのホテルで、小野さんと上下の部屋に住んで一緒

に食事をしたり、例によって、あれこれ夜遅くまで話をしたり、スケッチに出かけたりした、そんな日常の中のふとした言動のはしはしに僕は感じていた。画家にとって、モチーフに出会うことは、ひとつの事件であって、昨年ヨーロッパでその事件の渦中に居た小野さんは、とうとう何かをやっつけたと言う感じを僕はその個展を見て強く感じたものだった。

小野さんは、海や空がとても好きだと言っていた。それはむしろ哲学と言っていい程のものだと僕は思う。小野さんがその大きな個展の作品を描き終えた時、何か力が出しきれなかったとふと言ったけど、それを言う小野さんの脳裡に、海や空がひろがっているのだなと感じる。

岩かげから美しい音楽が聞こえてくるので、それにひかれて岩かげをのぞいたらそこには醜い半獣半人の動物が笛を吹いていたと言う絵があり、その題名が芸術家とあった。アトリエの作者は多分その戯画通りだろう。そこで何か起きているかは、公やけにしたいとも出来ない秘密で満ち満ちている。

訪問者 蛭子善悦 会員



カット 原 義行

●アトリエ訪問



西村 貴久子 会員

ここは繁華街だが地下の静かな喫茶店の一隅、お客は少ない。穏やかでモノ分りのいい感じの西村さんを前にして私はお話をきく。還暦をとうに終えられ、凡ての意味で先輩であるこの人はもの静かで言葉もききとり難い位。しかし持ち前の烈しい気性、どこまでもやり抜く作家魂はかくされている筈である。

西村さんの作家歴を尋ねてみる。室蘭生まれ、小樽高女卒、直ちに周囲の反対を押し切って単身上京、岡田三郎助に師事する。時に大正15年、昭和4年の帝展に初めて入選する。当時の新聞は全国版で大々的に報道、昭和22年改組文展で特選となる。この間岡田氏主宰の春台展会員、つづいて光風会会員、日展無鑑査(22年)、現在依頼となっている。

画風から言うと初入選の頃は岡田三郎助氏に自然よく似た美しい精緻な人物画、その後岡田氏もなくなったが、色がだぶかみで構成的な感じに変わる。この頃を緑の時代と称しておられる。特選はこの頃。次に流水をテーマとする時が来る。これがう、6年続いて今度は馬がくる。筆は大きく荒々しい表現となっている。

10年前御主人が喘息をわづらわれ、この看病のために制作は自然束縛、苦しい環境のなかで不本意な活動を余儀なされる。まことに同情に耐えない。この病気を直すために空気のきれいな所というので札幌転居となった。だから本当のアトリエを作るまでに至っていない。この苦痛から解放されるのは容易でなさそうに

思える。せき込みが始まったら夜中であろうと看病しなければならぬ。これをだまって耐えている西村さんはえらい。この話のなかで西村さんの絵画観を少しおききした。

「絵は環境や社会から影響されるものだと言うが、自分は反対意見だ。絵は画家と画面との孤独な対話、或いは対決、斗いであって、その間に何物も介在しない。絵が次第に変化発達してもそれは社会性によるのではない」と強く言われた。「然し作家の純粋な制作を続けさせるものは、それを可能にするための環境が与えられなければだめだ。自分は長い看病のため自由な研究、思うような制作が出来ない事情が何としても苦しい。気負ってもいつしか一人ぼっちの淋しさにかまってしまう、しよげてしまう自分の常である。これは運命だ」と嘆かれる。しかしあまり暗い感じはうけない。淡々とした感じは同じである。「と言ってあきらめているのではないぞ。とにかくどこまでもやれるところまでやるのだ」と固い決意を被瀝された。誰だって明日の運命は分らない。私は病苦というものを知っている積りでいる。西村さんは同情などという甘つたれは微塵もない。そこに作家魂の片鱗を見た。

どうか御主人の病気が一日も早く快癒され、晴れた気持ちで筆を持たれる時が到来することを心から祈念して筆をおきます。

訪問者 砂田 友治 会員



カット・西村貴久子



竹内 豊 会員

竹内豊氏と小生はよくけんかをする。先日もキャンパスのことで言い争いをして2週間ばかり音沙汰がなかったが、しばらく会わないと気になっていたが、丁度アトリエ訪問の原稿取材があったので彼のアトリエを訪れることにした。会えば例の如く酒盛りが始まり画論をたたかわせ、喧々ガクガクつかみあわんばかりとなり、またいたく反省する。

25畳の広いアトリエは天井が高く採光も充分で、電灯設備も申分なく夜でも昼でも変わらないようにしてある。アトリエの隣合わせに200号の絵が荷作りしたまま搬出できるようにしてあったり、附随して絵の格納庫があったり大変ゆきとどいた仕事部屋で感心してしまった。面白いと思ったのは2階の寝室から電灯を点滅して仕掛けした小窓を開き、アトリエの作品を眺め寝ながら想を練ることができるようになっていることである。

部屋の中は大作主義のとおり150号、120号の描きかけの絵が7、8点ほど立てかけてある。どの絵にも刷毛の見えないデリカシーな塗り方である。彼の一眼野放図な人柄や言動からは憶測できないせん細さで描かれている。事実作品の何週間も前から神経がかなり病的になり人を寄せつけない。小生はこれを「ガラスの神経」とよんでいる。

ともあれ彼の体質の中にあるドライの物のあわれや孤愁が画面への定着を期待するもの大である。

語り終わって外へ出ると5月の夜風は酔いしれた身体には心地よかった。

訪問者 後藤庸也 会員

●アトリエ訪問

山内壮夫 会員



濁りなき弧高の城

風薫る5月の日射しが緑の芝生を鮮やかにし庭の繁みに無雑作におかれた彫刻はその存在を明らかにしてフト京都の石庭が脳裏をよぎり、また城の石垣をまかいま見た。この前庭を通りぬけベルを押すと、いつまでも若々しく美しい奥様に出迎えられ、お話は一気に「札幌の美しきよき時代」に花が咲く。昔の豊平館のあたりは奥様のホームグラウンド、円山に近い北2条通りの並木道、三井クラブの庭園等は先生の揺籃の地とか、夕日の沈む手稲連峰の山なみを想い「故郷ばなし」はいついつ果てるともなく……あー 札幌夕

アトリエの床は古都の石だたみのように堅く厚く、彫刻という立体の動きから生れる巨大な「量」を持ちこたえるに充分な安定感があった。高い天井、白い壁は澄んだ明るい空気を包みこんで、広いアトリエを覆いつくすように生きついている作品は無秩序にまた整然とあるものは小さく、あるものは大きく各々にこめられた情熱が深い年輪をきざんでいた。初めて国展に出品し激賞されたという静かで力強い青年像は、先生がいつも身近かにおかれて初志忘るなかれと自らの戒めとされておられるとの事、いつまでも初々しい心で制作に立ち向われる先生の真情がうかがわれた。札幌市役所にその畏を誇る北海道開拓の父、島判官の巨像は先生の郷土への憧れと熱情を物語っているかのようだった。初期の作品にはリアルで求心的な青年像が多く、そして母子像の暖かな豊かさ、……そしてやがて飛翔が……そして「鶴の舞」へと変貌し深められてゆくのである。無駄のない清潔さと、とぎすまされた直感とその名の如く羽ばたきまでが気高き峰にこだまするように気品ある高度の次元に舞いつづけるこの鶴は

これからどんな優雅な舞をみせてくれるのかと、その美しい「かたち」に見とれていた。

先生の15年程前の渡欧は昨今の渡欧ブームとは違い海外旅行の先駆者だった。帰朝談は当時の札幌っ子たちの心をゆさぶり胸をおどらせたものだった。今このアトリエの壁にも先生ご自慢のカメラマンぶりを発揮された想い出深い写真やデッサンが数多くかけられてあり、その中でもフランス中部のオータムという町の小さな教会にあったというアダムとイヴのうち、イヴだけのレリーフは世界でもめずらしいものとしてその由来をうかがって興味深いものがあつた。ミケランジェロの最後の傑作ピエタ像と出合ったときの感激の嵐にふるえたミラノの美術館の事、シンリーの美しい想い出、その国々のレストランのおいしいものまずいもの等々、当時の旅行が今日のそれよりも数倍の苦労と困迷とスリルとに満ちていて、又それがより大きな喜びと深い印象を心に刻んで来られたかを話される先生の眼鏡の奥の目は生々と輝いておられた。この時奥様がこれぞ日本の味、これこそがお茶であるという見本のような、渋いお茶器にこれはまた、何んともまろやかな香りのお茶とお手づくりのお草子を選ばれて、なる程先生の創作活動の源泉はこの奥様の深いお心づくしの味があるからこそとうなづかれるのである。

先生は珍しい貴重な本をいち早く手に入れられる才能もおありでピカソの10歳前後の油、デッサンを集録した全集をみせて頂き本当に驚いて了った。8、9歳の子供と言えさすが巨匠の基礎はすでにこの時代に創られているのである。恐らく日本国内では再び他で見ることの出来ない全集であろう。

先生は今年の新制作協会の運営委員に推されご多忙

な毎日になることとお覚悟はされておられるがピカソのポスターを目になさり、スペインの南部地方のアラブ文化の流れが混然とからみ合った地にもう一度旅してその魅力確かめて見たいと、闘牛の国スペインへの遙かな想いを馳せておられた。私は緑の森にあおい空に美しく舞う鶴の幻映を夢みながらおいとまを告げたのだった。

訪問者 安多郁子 会員

森本三郎 会員

森本三郎さんといえば、冬の小樽の街の絵を思い出す。灰色にどんより曇った空の下に、屋根に鈍く光る雪を乗せて、重なり重なる坂の街、こんな森本さんの絵は、全道展の中でも独特の風格を持ち、ひと目で、だれの絵でもない、森本さんの絵とわかる。

私がアトリエをお訪ねした5月のある日、陽は輝き海は青かった。高台にあるお宅への道すがら、森本さんにお目にかかった日々のことを考えてみると、直接お話をした記憶よりも、だれかとアワをとばして論じていらっしやるのを、横で拝見してたことが多い。そんな時の森本さんは失礼だが自我を主張して、まことにがんこであり、私などは、一辺でやられてしまうなアと思ったりする。その人が、きょう不機嫌だったらどうしよう。——つまらないことを思いながら、お宅へ！

久々にお目にかかった森本さんは、オヤとびっくりするほど柔和な目の持ち主で驚いた。「本当はおっかなかったんですよ」心の中でそう言ったのは図に乗ったからかも。

「だれにでもそんなことはないよ」目がそう答えてくれたと思うのは勝手な想像？

それでも、腹が立つときの説明はちゃんと聞きました。

「若い人の絵なんか見ている、何だか作者不在の絵だって感ずることがあるでしょう。そんな時に一番腹が立つ。それをわかったような顔をしている人にも腹が立つ。どうしてちゃんと、本当の自分の絵を描かないのかなア。他人は他人だと割切ってしまうばいいの

かも知れないけれど、とにかく腹が立って、腹が立って……」

アトリエの一隅に椅子の上にキツネやヒョットコのお面がのってる静物があった。大丸での展覧会で拝見し、印象深い作品であったがもう10数年も前の作品にいまなお新鮮な美しさが溢れている。そうそう時の流れで変っていいものではないのだよ、と作品の中から森本さんの声が聞えるようだ。

最近は大変な行動力と制作に対して積極的な姿勢をお持ちだと拝察した。光子夫人との毎年の東京2人展、その都度繰り返される奈良への旅、パリではない奈良であるところに森本さんの面目がある。日本文化の頂点の中でいつもの自分姿をきびしく見据える。それが森本さんの作品の基盤であろう。とき澄まされて無駄のないデッサンに息をのむ思いだった。絵画ブームについての批判、作家としてのあり方など、側の光子夫人との呼吸のあったやりとりは漫才というボケになったり、ツッコミになったり、またまた目を瞠る思い。

ご夫妻に送られてお宅を出た。海から吹き上げてくる風が、今度は快い5月のある日であった。

訪問者 竹岡羊子 会員

